

## 電子書籍と書籍の解体

花田謙一

「メディアはメッセージである」

この有名な言葉を残した社会学者マクルーハンの古典「メディア論」では情報の中身、コンテンツよりも媒体の影響力の大きさを指摘した。彼の教えを咀嚼すると「内容、書かれていることだけではなく、そのメディアである媒体（ユーチューブやスマホ等）自体の特性からもメッセージを受け取っている」ということになる。電子書籍もその媒体に包含されるだろう。

今の電子書籍を取り巻く状況を見るとこの言葉についていろいろ考えさせられる。羊皮紙から50年、紙になり約500年経過して今に至るが、数年で完全に電子化されていくのだろうか？識者によって今は完全な電子化への過渡期であるという人もいるが、Forbesが2018年の記事で書いていたように紙は匂いや手触りを含む精神的な結びつきを提供し、一方で電子書籍は本文の検索、文字の拡大や携帯性という新しい価値を提供する意味で異なる読書体験を提供する完全に違う商品と捉えることもできよう。Covid-19の影響により、図書館の電子書籍の利用が3～6倍と急増している記事をメディアでも見かけるが、本当に電子書籍が受け入れられたのか、または一過性の現象なのかは今後も注視したいところである。

最近「デジタルで読む脳×紙の本で読む脳」メラリアン・ウルフ著（インターシフト社）を読んだ。脳科学の視点で読書を分析した画期的な本である。電子書籍を読んでもあまり記憶が残らないという人がいるが、これを読むとあなたが気のせいでもないことが分かるだろう。要諦は紙の読書は共感や類推等ができる深い読み、一方のデジタル読書は斜め読みや飛ばし読み、興味のある部分の部分参照といった軽い読みに向いているとしている点である。後者だどこまで読んでいくかという全体像の把握や物語の順序がつかみにくく、深い理解が得られないとしているのも興味深い。この二つの読み方ができるバイリテラシー脳を形成していこうという結論だが、自分の経験だと最近では圧倒的に

デジタル読書が多くなっていることに気付く。つまり、この本によれば私の脳はデジタル脳になってしまっていることになる。

ところで、電子書籍の読み方には大きく分けて三つの類型があるとされている。

①キーワード周辺の部分参照、②章（チャプター）レベルでの部分参照、そして、③通読である。通読も一定の割合で読まれているのだが、①と②、つまり部分参照で多く読まれるのも電子書籍の大きな特徴になろう。小説ではなく学術書や辞書であればこのような読み方は合理的な読書方法だと思っている。書籍なので、せめて章単位では読んでほしい所である。なぜこのような読み方ができるのかだが、お察しの通り全文検索ができるからである。つまり、キーワードを打ち込むだけで読みたい書籍の本文からキーワードに関係するページを抜き出してくれるのである。これは紙ではできない読書体験であることは論を待たないだろう。個人的に気にしているのは目的の書籍を対象に全文検索をかけると、打ち込んだキーワードの出現頻度が章ごとに数値化される機能である。これにより一目で打ち込んだキーワードと関連度の高い章が可視化され、かつ特定のページに遷移するのである。これは一度体験すると病みつきになるだろう。しかし、先に紹介した深い読みを意識するようになり、じっくり読みたい章は面倒でも印刷して読むようにしている。章単位での印刷になるのだが、デジタルとアナログの融合といえる。立場上、いろんな図書館の電子書籍の統計を見る時があるが、日本ではあまりこの印刷が使われていないようだ。皆さんはどうだろうか？

とりとめもなく電子書籍に関する考察を述べてきたが、これを契機に冒頭のマクルーハンの言葉を今一度考えてみたい。「メディアはメッセージである」。

はなだ けんいち  
(EBSCO Information Services, Japan)